

佐渡の中世―日蓮上人配流とその周辺

今日は、日蓮上人の、主として佐渡にかかわる事柄について、お話してみたいと思います。その事柄といえますのは、日蓮が流された十三世紀、佐渡はどういうふうであったか、歴史として日蓮をみると、どういうことがわかるか、ということでもあります。

最初に年号のことを申し上げておきますと、日蓮が佐渡へ流されて来たのは一二七一年でありまして、それから二年五ヵ月ほど佐渡で生活することになります。

私どもが今、根本寺とか妙宣寺を訪ねますと、昔佐渡で聞いたような伝説を、それなりに色々教えてくれるわけがあります。

しかし、いつの時代でもそうですが、歴史上の出来事というのは政治的なところがありまして、戦に勝ち負けをしている間にもその考え方がすっかり変わってしまう、ということが時々あります。しかも、それは少し変わったというのではなくドンドン返して変る。今迄正しかったことが、次の時代には全然正しくない、というようなことになったりする。歴史というのは、その時の政治の影響を非常に強く受ける訳であります。例えば第二次世界大戦の時、八月十五日に戦争に負けると世の中皆民主主義に向かっていく。自分は今生れつき民主主義者であった、という人まで現れたりするものです。

さて、根本寺は身延派の系列に属する寺であります。法華宗の中でも身延が大きくなるのは家康によってであります。ご存知のように家康の基盤は駿河で、地理的に身延とくっついているので、日蓮の生地でもなかった身延の立場が、家康の時代になりますと大きくなって参ります。

それで政治上、身延山の系列である根本寺が、佐渡で勢力を持つことになります。それ迄威張っていた市野沢（一谷）の妙照寺や阿仏房妙宣寺の方が根本寺の下寺になるという現象が起きます。

慶長五年（一六〇〇年）家康の手に天下が渡った頃は、未だ根本寺は存在しておりません。この年に佐渡ではじめて「検地」というものが行われましたが、根本寺のある大野村の検地帳には真言宗弘樹寺の名前は載っておりませんが、根本寺の記載はありません。根本寺は弘樹寺の境内にできるんです。

私どもが今、根本寺に行きますと、こんな話を聞くことがあります。

「ある百姓が毎日山へ行く時に握飯をこさえて、日蓮のところを持って行きます。彼は家へ帰って来ると『腹減った、腹減った』と言うもんですから、婆さんは疑って『こりゃ、きっと妾にでも握飯をくれてやってるに違えねえ』。ある日婆さんは、握飯に毒を入れます。すると毒入り飯を差し出された日蓮は、何故か『今日は食いとうねえ』と言います。そこへ犬が近づいて来たので、日蓮が握飯を与えると、犬はペロツと食べて死んでしまうた」

この百姓が、日蓮を預った守護代の本間六郎左衛門ということになっておりまして、根本寺には「犬塚」なるものも残っておりますから、誠に本当らしくみえますけれども、実は四百年前には形もなかったのです。では、どうしてこのお寺が出来上がり、いつの頃から伝説が結びついたのか、という点を知ることが、ある意味では、歴史というものがどういうふうに戻りしていくものであるかを考えていく上で、大変面白いことでもあります。

そこで実際の歴史は、どんなふうになっていたのか、ということをお話してみたいと思います。

日蓮がどういう流れ方をするのかと言いますと、一二七一年九月十二日に配流という罪にきせられる訳であります。日蓮が流される直接の原因になったのは、真言宗の良観という偉い坊さんが鎌倉で雨を降らすご祈禱をした時、日蓮が「あんなことをしたって当るわけがない。大嘘つきだ」と誹謗したのであります。雨が降るかどうかということも兎も角として、困った時の神頼みでありますから、それはそれでいいんであります。日蓮には許せなかったのでしょうか。このことが切っ掛けとなり、佐渡に配流されることになりました。

佐渡は奈良時代から人を流す場所とされておりまして、奈良・鎌倉時代を通じて五十人以上が配流されてまいります。日蓮もその一人であります。日蓮以前には、順徳上皇や文覚上人などが流されております。

佐渡へ流される場合、どういふことになるのかと言いますと、佐渡の守護に渡されるのであります。当時の佐渡の守護は大仏おほぶつ宣時で、北条氏の一門であります。実際には守護が佐渡へ行くわけではなく、守護

代として本間六郎左衛門という人物が任命されます。しかし彼はいつも佐渡にはおりません。今の厚木（神奈川県）に住家がありまして、そこが彼の本領であります。

次のように考えて頂ければ宜しいかと思えます。

承久の変が一二二一年に起きます。その時北条氏に味方をした人達に、北条氏が恩賞を出すのであります。今ならお金で与えることになるのでしようが、当時恩賞といえば様々な職につけるということでありました。職の中でも鎌倉幕府が盛んに用いたのが、地頭にしておあげることでありまして、これを「職」と呼んでおりました。つまり「地頭職」というものを与えたわけでありました。佐渡は承久の変迄は藤原氏の領地でしたので、承久の変が終わると、北条氏は武士に対して佐渡の各地域の地頭職を与えるのであります。佐渡は国有地が多く、当時は「国衙領」と呼んで郷を単位として地頭職がありました。皆さん、羽茂本郷とか吉井本郷とか、本郷で呼ぶ地域がありましよう、あれが昔の郷でありまして、佐渡には十五ぐらいはあるでしょう。

「守護代」といいますのは、守護の代理人という意味で、その国で地頭職を一番沢山持った人がなります。ですから本間六郎左衛門が守護代であるということは、彼が佐渡で地頭職を三つも四つも持っていた、ということでもあります。

一つだけ例を挙げておきますと、地頭職を共通に持っていたところには、共通の名字があります。例えば真野の吉岡に「若林」という名字の地頭がいたとしますと、彼が吉岡の地頭職と羽茂の地頭職を持っていた場合、吉岡にも、羽茂にも「若林」という名字があることになります。人が移住しているのです。従って、佐渡で離れた所に同じ名字が沢山あるというのは、地頭職を共通に持った人が往き来したことの証拠であります。

話を元へ戻しますが、佐渡で地頭職となった本間六郎左衛門は、実は佐渡の幾つかの郷の年貢の徴収権を持っており、日頃は相模国依智郷厚木の本間村に住んでおりました。「本間」は名字になりますが、元々本間は村の名でありまして、鎌倉時代は自分のいた村を出て地頭職になって他所へ行くと、自分の住んでいた村の名前を名字にするのが慣例だったので。

その慣例は戦国時代にもあって、新穂の瀉上城主は、上杉氏に付いて米沢へ行きましたから米沢には「瀉上」という名字が沢山あります。沢根の場合も同じように米沢に行きましたから、米沢には「沢根」という名字が少なくありません。佐渡には「佐渡」という名字はないのですが、佐渡から能登へ行った人達は、能登では「佐渡さん」になります。相模平塚の土屋村から来た人が、新穂の地頭職になりますから「土屋」が新穂に多い。横浜の藍原から来た人が「藍原」。武蔵渋谷から来た人が「渋谷」であります。赤泊に「羽豆」という名字がありますが、一四七〇年頃、愛知県で浄土真宗と比叡山が喧嘩をしました時に、羽豆郡から佐渡を頼って逃げてきた連中です。ですから赤泊や羽茂では尾張の言葉を使っています。私は金澤村（現金井町）ですから大根のことを「でいこん」と言いますが、赤泊などでは「りゃあこん」です。愛知県では「りゃあこん」といいますよ。

世の中は毎日変わっていくような気がいたしますが、文化の土壌というのは、余り変わらないということですね。或る場所から束になって移って来ると、その連中がずっと言葉を残していきます。

さて、日蓮は佐渡に流される前に厚木の本間六郎左衛門に預けられることになります。日蓮はどこにいても非常に沢山の手紙を書いておりました、当時これ程多くの手紙を書いた人物はなかなか見当りません。しかもその手紙は長文で書かれており、例えば妙宣寺の阿仏房の細君に宛てた手紙などは読むのに手間取ってしまう程であります。また日蓮は、ものをオーバーに書く癖がありまして、例えば「佐渡へ行って四カ月も太陽を見たことがない」などと書くのですが、ウソだろうと思えます。それ程酷い有様であったということが彼が書きますと、今のような形で伝えられるのであります。日蓮の伝記を見ますと、色々なことが分かります。その中の一つ二つ掻いつまんで申し上げておきます。

日蓮は、九月十二日に佐渡へ配流という罪の言い渡しを鎌倉で受けます。その日の内に彼は鎌倉を出て、夜本間六郎左衛門の家に預けられます。途中「竜口法難」というものがあって、日蓮は危うく殺されるところを雷が鳴り奇跡が起きて助かったという話がありますが、あれはウソでありましょう。最初から「配流」という命が書面で出ております。まあ、途中で殺されそうになったかも知れませんが、殺される筈は

なかつたのであります。

十月十二日に厚木の依智を出発いたします。何故一ヶ月も厚木に留め置かれたか、それは当主六郎左衛門が佐渡に行って留守であつたために、日蓮を何時佐渡へ連れて行くかということ佐渡へ問い合わせる期間が一ヶ月必要だつたのです。当時は配流者がいる場合、先触れといつて、明日は何処へ泊るということ連絡しなければならなかつたからであります。

その頃、鎌倉から寺泊までの日程は十二日間。これは決まりでありまして、古い時代ですからいい加減に歩いたとは考えないで下さい。昔は、道路が不便だつたから日数が多くかかる時もあった、なんて許されません。往く時も、佐渡から還つた時も、きちつと十二日間で鎌倉に着いております。

十月二十四日に寺泊に到着します。冬の海ですから、ここからが問題であります。相当荒れたらしく、日蓮がお経を読んだら、海が静まつたという話をつけておりますが、舟はかなりの揺れ方であつたであります。ましよう。

二十八日に松ヶ崎に着きます。この頃の舟は大変小さいもので、長さ二、三間、漕ぎ手が四人程の、今のハシケ程度のものでしょう。ですから波が穏やかでも沖に出れば揺れるわけでありまして、日蓮は余り舟に乗つたことがありませんから、驚いたであります。しかし日蓮は漁師の息子ですから、海が荒れるのを知らないわけはありません。日蓮についていつた連中はきつと魂消げたことでしょう。

松ヶ崎に着くと旅人は必ずそこに一泊しますから、日蓮もそうしたのであろうと思われます。松ヶ崎に今、法華宗の名刹で本行寺ほんぎょうじというお寺がありますが、江戸時代の初め、佐渡の金銀山へ米を運んで財を成した松ヶ崎の廻船業者菊池喜兵衛が建てたものであります。このお寺の辺りは「日蓮上人上陸の地」とも伝えられておりますが、真偽のほどは判りません。

このお寺には、或る伝説が残っております。

「日蓮が佐渡へ流される途中、舟底から水が洩れ、日蓮が法華經を読むと、水洩れが止つた。舟をあげてみたら舟底にアワビがくっついていた」

このような話は、日蓮の専売特許ではありません。加茂駒坂の羽黒神社の蜂子皇子伝説にもあり、赤泊

ところで日蓮を預かった阿仏房の家は何処にあったのかは分かりません。しかし日蓮の手紙の中には、自分の居た場所について、こう書かれています。

「六郎左衛門が家のうしろ見の塚原と申す山野の中の堂で生活した」

通俗的に言えば、自分の家から出ると六郎左衛門の家が見える、そこは山野の中で、地名は塚原という所である。この程度のことか判るのであります。

先程申し上げた通り、国の中央を示す事項、例えば安国寺とか一ノ宮神社というものが畑野にあります。新穂の根本寺には一六〇〇年代（慶長）の初めまでは、お寺はなかったのですから新穂に住んでいたことにはならないわけであります。

日蓮の手紙には、「毎晩阿仏房がお櫃に飯を入れて自分の所へ運んでくれて、大変有り難い」という意味のことが書かれています。この書き方から見ると、阿仏房の家と日蓮の住むお堂は比較的近い距離に在る感じがします。

私の子供の頃の阿仏房は真野の竹田にありまして、新穂出身の先生から教えられたのは「毎日竹田から大野の根本寺迄ご飯を運んだんだぞ」と。ある生徒が「雪が降ったらどうするんですか」と訊くと先生曰く「そりゃ、偉い人間なんだから神様のように速いんだ」

成程と思っておりましたが、昭和十年代と今とでは世の中が変わっておりますし、阿仏房妙宣寺が出来た時や、当時大野に根本寺がなかったということが判って参りますと、色々な面からものが解けてきます。そこで、本間六郎左衛門の家が何処にあったのかを捜す仕事が続けられるわけであります。「六郎左衛門」を捜しますと、あちらこちらにいる。例えば新穂の根本寺の隣に家がある本間六郎左衛門の場合、その老人は堂々と先祖から聞いたという話を喋ります。

「昔どっかから来た坊さんが、ものも食わんでお堂で毎日お経を読んでおった。どっから来たかと訊いたら、鎌倉から来たと言った。腹減らせんか？ と訊くと、腹減るとるが我慢しとる」

それで、その老人が毎日握飯を運んで行く―例の犬塚の話になるのであります。私はその爺さんが亡くなる前に訊いたことがあります、彼はうっとりする程、まるで見てきたように話す。

「本間六郎左衛門が毎日、木を切りに山へ行ったか？」と質問すると爺さんは「そりゃ、わからん、わからんけども先祖から聞いたとる」と答える。

恐らく江戸時代になってから作られた物語であります。本間六郎左衛門が厚木にいて、佐渡の守護代であることは、世の中の人にはわからなくなってしまいました。今の話がウソだと思ったら、見よ、そこに犬塚があるではないか、となるのであります。

これがウソであることは明らかでありまして、現実には六郎左衛門の家は小さいんです。もしも守護代の家であれば一町四方くらいの大きな堀がある筈です。話は作れても、堀をつけることは隣の家があって出来ません。六郎左衛門の悲しいところでもあります。

ですから、舞台装置というものは、自分の枠の中では出来ても、真偽の程を見通せる場合が多い。

そんなわけで本間六郎左衛門の家は断定的には申し上げられません、彼がどういう宗教的施設を持っていたかを考えてみた方が早いと思います。

本間氏は、熊野信仰の持主であります。大体相模という地は伊勢商人の勢力の強いところでありまして、熊野信仰者も多い。お分かりのように、佐渡は異常なほど熊野神社が沢山あり、県下第一位。その中でも一番大きなものが下畑にある。私は古い写真でしか見たことがないのですが、畑野から金井の病院（佐渡病院）に行く途中に大きな森があることがわかります。

この熊野神社の場所が、本間六郎左衛門の家の跡のような感じがするのであります。この神社の跡に立って周囲を見回すと、国仲平野が彼の家の後側になってしまっているのですが、向き方によっては違って見えるのかも知れません。

では、阿仏房の家は何処にあったかについて少し考えてみたいと思います。

畑野の目黒町に同じ法華宗で妙満寺というお寺があります。その墓所に阿仏房の息子（藤九郎守綱）の墓がありますが、その息子は阿仏房が死にますと、その遺骨を持って日蓮の所へ出かけて行きます。日蓮はそれを迎えて、大変劇的な文章を「日蓮消息文」の中に残しております。

阿仏房の息子の墓が妙満寺にあるということから類推しますと、その辺りに阿仏房が住んでいたことを示すもののように思われます。

もう一つ、そう思ってみればという程度ですが、面白いことがあります。真野にある阿仏房妙宣寺というお寺は、住職が留守の時は昔から妙満寺が支配するようになっておりまして、いつも妙満寺が代役をしているのであります。このことから妙満寺が阿仏房の家ではなかったか、と考えられるのであります。

さて、日蓮の配流について七、八人の者が一緒に来ております。恐らく彼らはお堂で生活したのだろうと思います。飯を食べる時には非常に困ったでありましょう。配給米は配流者一人に対して一日一升が与えられる。一人で生活するには充分です。まあ、「一升飯を食う」という人もいますけれど、七、八人いたらとても堪りません。このような時も日蓮は人嫌いなところがあつて、外へ余り出ない。専ら飯の世話をしていたのが、日興（にちこう）後の創価学会の元祖であります。佐渡で有名な日朗上人は、何もしようとはしません。日蓮が困っている時も日朗は近づかない。

日蓮がダメになった時は大抵の弟子が、彼から離れていきました。世の常であります。唯一人日蓮について歩いたのが日興でした。日興は金を得るため盛んに曼陀羅（お札）を書いた。南無妙法蓮華經の左下に署名があり、宛先も書いてありますから直ぐにわかります。金井町の本光寺へ行きますと、いつでも見せてくれます。日興が飯を貰いに行った所にそのお札を置いたのであります。

日蓮は阿仏房の所に預けられて半年後、一谷（いちのさか）（現佐和田町市野沢）に場所替えをします。これが今の妙照寺でありまして、低い地にあるけれども、元は一谷入道の家が高台にあつて、戦国時代の終りに今の場所を買って取ってお寺を造ったわけでありまして。だから山門がお寺と反対側についておりますよ。

日蓮は一谷入道に大變世話になっておりますので、鎌倉へ帰る時に一谷入道に「向うに帰ったら、お前に法華經を書いてやるぞ」と約束する。ところがそれを日蓮は忘れてしまひます。日興が約束を守らないのはよくないと言いますと、日蓮曰く「彼はどうせ字も読めないし、書かなくてもいいんじゃないか」、約束事を違えるのは良くありません、と日興が怒ります。そこで日蓮はしぶしぶお経を書くことになりま

す。「このお経は本人が読めないであろうから、墓の前で弟子に読ませるように」と書き添えています。

日興という人は割合真面目な人でありまして、七、八人の生活を支えるために非常な努力をしましたが、一谷入道もまた大変律義な人であつたらしく、日蓮の手紙文などに度々彼の名が出てまいります。日蓮は上手い字を書く人で、女の人宛の手紙が多く、滅多に男には出さない。こんなことも書いています。

「もしおれを見たいと思うたら、月を見よ。いづれ月に姿を浮べるであろうから……」

日蓮の手紙を見て思うのですが、彼は相手によって漢字の数を決めてゐるんです。例えば北条氏に出す場合は全文漢字で書き、一谷入道や阿仏房の細君（千日尼）に対しては平仮名を多く使う。当時日蓮のちに眞宗をたてた蓮如だけがこういう手紙を書いたのであります。蓮如は片仮名ばかりを用いたので、彼は片仮名しか書けないのではないかと馬鹿にされた。しかし普通の人は漢字を書くことで学のあるところを示していた時代ですから、逆に平仮名や片仮名で書くというのは相当な水準であろうと思われまゝ。

江戸時代に日蓮宗の施設がどういふふうにして生れたか、について申し述べてみます。

佐渡の本間氏が滅びた翌年、つまり天正十八年（一五九〇年）に日典にちけんという京都の妙覚寺みょうがくじの住職が、佐渡を訪れ、佐渡の日蓮宗設立に非常に大きな役割を果すのであります。そもそも日典が、何故佐渡と関係を持つようになったのか、日典は佐渡から出したある人物からの手紙を持っていました。その人物とは、私どもも知らないのですが、仏寿房ぶつじゆうぼうといひます。仏寿房に関して、池上本門家から出された手紙文が、現在、佐和田町中原の妙経寺みょうきやうじに保存されております。

その内容は大体次のようなものです。

「仏寿房という人物が最近佐渡へ行った。その男の見掛けは、どこかのおっさんような格好をしておるけれども、実は非常に偉い人なのだ。堺に寺を建立したり、池上本門寺を修復する時大きな力になったりした人物である。この程佐渡へ渡つたのは、堺から川原田へ行った商人を訪ねるためである」

川原田は今の河原田であります。本町は寛永年間に出来まして、その裏側に京町という細い通りがありますが、昔の本道です。そして佐渡高校へ行くところにあるのが、堺商人が作った大坂町であります。河

原田という町は、本間氏が沢根の鶴子つるしに銀山を持つていたことから出来た問屋町です。

こうして、仏寿房なる人物は、日蓮の配所を一生懸命訪ね歩き、色々調査していることが分かります。その一つに新穂の弘樹寺の話がある。

「昔、うちの住職が日蓮という坊さんと論を闘わせて、うちの方丈が負けた。逃げて帰ろうとしたら、日蓮が筆に墨を含ませて投げつけた。命中した背中には「南無妙法蓮華経」と書かれていた。家に帰ってその文字を消そうとしても取れず、鉋かんなのみや鑿のみをかけてもダメ、とうとう薄れてきたが、背中が抉られてしまった」

弘樹寺のあった場所には、今根本寺が建っておりますが、当時弘樹寺と根本寺が土地の所有をめぐる争いをする。こうした情報を仏寿房は日典に送りますと、日典は是非自分も日蓮の配所を訪ねたいと考える。やがてその機会が訪れます。

天正十八年に上杉氏が佐渡を攻め落としますが、その時の総司令官が直江兼統。兼統の父親は京都妙覚寺へ出かけて行き、妙覚寺と仲良しになります。妙覚寺というお寺は不受不施派といまして、法華經の信者でない人の葬式はやらないし、供養も受けないという考え方のお寺であります。そのために秀吉から弾圧を受けた。その後、本山妙覚寺と妙覚寺からやってきた根本寺の日衍ひえんとが大喧嘩をして、遂に家康が判決を下した。「不受不施派の妙覚寺は負け。身延の方が勝ち」になったのです。

そのために不受不施派を長くやってきた一谷妙照寺や阿仏房妙宣寺は立ち遅れ、根本寺のほうが上になり、後に身延派の本山として栄えるわけであります。

ところで、慶長十七年に京都の妙覚寺から日衍という坊さんが佐渡へやってまいります。先程の弘樹寺ですが、境内に造られたお堂（鉢山の人、備前遊白が造ったもの）を見て、ここに聖地を作りたいと申します。これに大金を投じた男が、山師の味方但馬であります。彼は当時新穂の銀山で稼いでおり、「要るだけの金は出そう」と約束します。この男が正教寺（のちの根本寺）を建てるのであります。お寺の説明板を見ますと、土一升と金一升と変えた、とあります。低い所ですから土一升を金一升で求めて、味方

但馬が銭を出したと言いたいのでしよう。その他根本寺には、味方が寄進した釣鐘があつて、鐘には味方の名前も入っており、元和四年と刻まれている。ここの本堂にはこれ以外古いものは何もない、あろうはずがない。

曾て、このお寺の富田さんという住職が、根本寺の歴史を書き残している。その中に「ここにお寺があつたという根拠はない」と記していますが、そう書くこと自体大変な勇気だつたらうと思ひます。

佐渡では、古くからしっかりしているお寺は、市野沢の妙照寺と阿仏房妙宣寺。妙宣寺は雑まじ太本間氏のお城だつた所です。上杉氏との戦いに負けた本間氏のお城を、直江兼続が阿仏房に与えたわけであり、それで阿仏房が新保村から移つて来たのです。

日典は、お城の跡に宝物殿も造っている。日蓮に關係のある手紙類—阿仏房に宛てたものや、一谷入道に宛てたものなど—をかり集めて保存されておりまして、日蓮の本物がこのお寺にだけあります。

以上のようなわけで、江戸時代の日蓮宗のお寺の分布がおわかりいただけかと思ひます。

因みに「佐渡流罪以前流罪以後」（略して「佐前佐後」とも言ひます）について触れますと、「佐前」の日蓮というのは、自分の考えることが正しく、他人の考えは全て間違ひであると断固として言い切るいささか鼻持ちならない人物だつたようであります。名誉欲も強く、個人と個人との関わりなどは問題ではなくて、事は天下国家であると主張する。

しかし「佐後」は人間にとって一番大切なことは人間と人間との關係である、というふうになつていきました。佐渡で暮し始めた頃は、佐渡の人間を獸の如き奴等だと悪口を書いていますが、自分のまならないことが多すぎて苦痛だつたのでしよう。

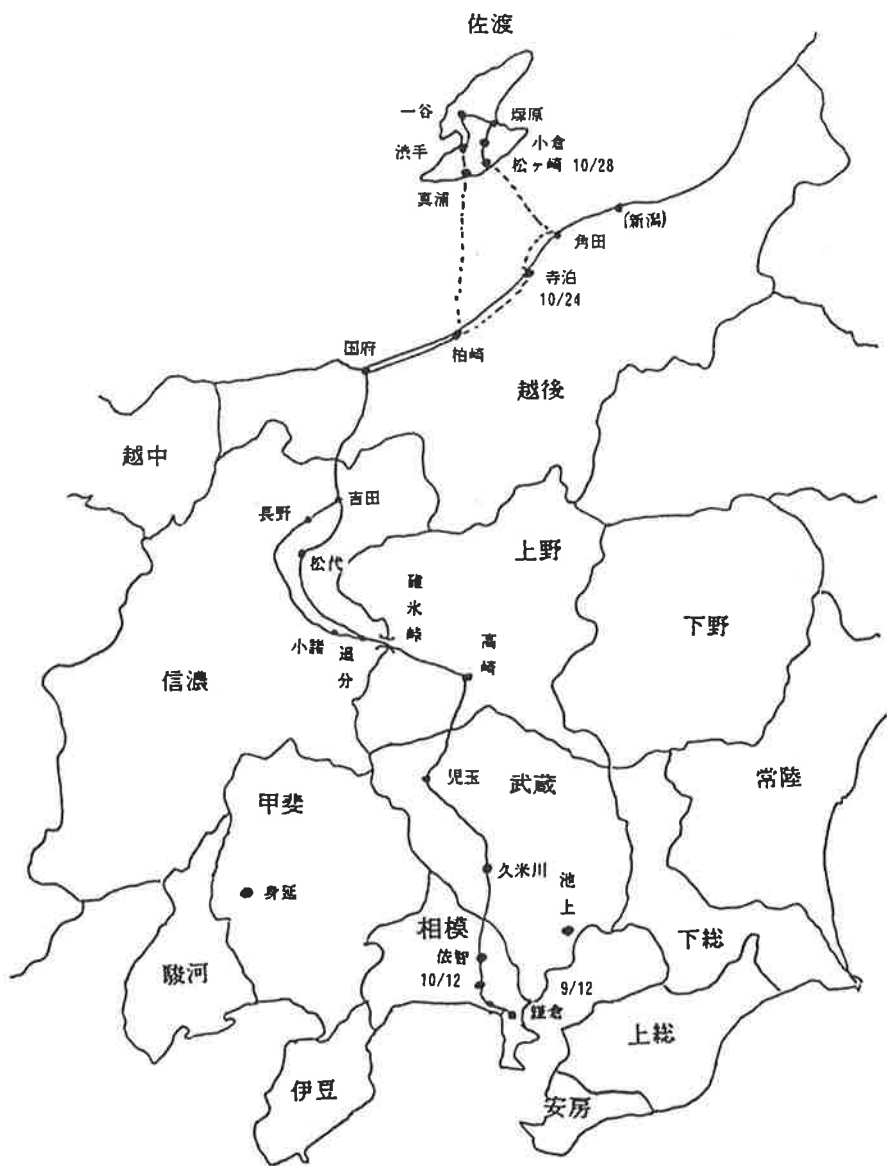
その後、自分の損得なしに佐渡の人が見せた人情を、日蓮は生涯忘れなかつたんであります。鎌倉へ帰る時には、述懐しています。

「さればつらかりし国なれども、そりたるかみをうしろへひかれ、すすむあしもかへりしぞかし」
佐渡の人に感謝をしつつ、後ろ髪をひかれる思ひで佐渡を去つたのです。



(平成八年五月十一日講演)
(了)

○日蓮足跡図想定通路(一部)



○日蓮略譜

西暦	年号	歳	事蹟
1222	貞応元	1	安房國小湊片海に生れる。
1233	天福元	12	天台宗清澄寺 道善房に師事。
1253	建長五	32	法華經を説き立教開宗、日蓮の名乗り公式表明。
1255	〃七	34	名越松葉ヶ谷の小庵に住み布教。この頃、日昭・日朗入門。
1256	康元元	35	鎌倉の街頭に出て辻説法。池上宗仲など武士、信徒となり「日蓮一門」形成。法然の念仏を批判。
1259	正元元	38	「守護国家論」等を著わす。日興入門。
1260	文応元	39	「立正安国論」執筆、前執権北条時頼に提出。
1261	弘長元	40	念仏批判再開、伊豆（伊東）へ流罪。
1267	文永四	46	母妙蓮没。日頂入門。
1268	〃五	47	蒙古から国書到来。執権北条時宗に「立正安国論」提出。
1270	〃七	49	大師講を中心に門弟教化。各宗に公場対決を迫る。日持入門
1271	〃八	50	律僧良観に祈雨争いを要求。名越小庵にて召捕らる。佐渡流罪。塚原三昧堂に謫居。
1272	〃九	51	佐渡の念仏者と法論（塚原問答）。「佐渡御書」等を著わす。阿仏房、千日尼この頃までに入門。四月、一谷に移る。
1274	〃十一	53	流罪赦免状到着、佐渡出立し鎌倉到着。のち身延山中の庵に住む。十月蒙古襲来。
1276	建治二	55	四月佐渡より阿仏房来山。
1277	〃三	56	三月阿仏房来訪。
1279	弘安二	58	三月阿仏房死去。七月藤九郎守綱、父阿仏房の遺骨を身延に納む。
1282	〃	61	病状更に悪化、身延を下山。九月武蔵国池上家に到着。十月本弟子六人を定める。池上家の館にて入滅、身延山に埋葬。